

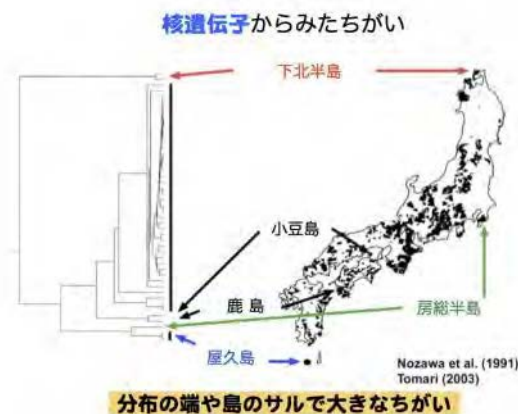
# ニホンザルのちがいを： 遺伝子の地域差

川本 芳(京都大学霊長類研究所)

古来より日本人とニホンザルの関わりは深い。その関係は時代とともに変化しており、ニホンザルは日本文化や日本人の自然観に影響を与えている。研究や教育の現場でもその価値は大きく、貴重な生物資源として利用されている。

ニホンザルは他種にくらべて遺伝的多様性が低く、地域差が小さい。しかし、遺伝子の地域差には興味深い特徴がある。この講演では、この地域差を話題に、ニホンザルとはどのようなサルなのかを考えてみたい。

遺伝子といっても、核とミトコンドリアの遺伝子には、地域差のパターンに大きなちがいがある。このちがいには、ニホンザルの生態と歴史が反映されていることを紹介する。



図の説明

核遺伝子とミトコンドリア遺伝子にみられるニホンザルの地域差。



霊長類研究所進化系統部門ゲノム多様性分野准教授。理学博士。  
1976年東北大学理学部生物学教室卒業、1983年京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。1985年名古屋大学農学部助手を経て、1990年より現職。  
専門は霊長類と家畜の集団遺伝学。現在のおもな研究テーマは、(1)アジアのマカクの進化・系統に関する集団遺伝学研究、(2)アフリカの大猿類の保全遺伝学研究、(3)高地における家畜化と家畜利用に関する研究。  
著書(分担執筆)に、『生物多様性はなぜ大切か?』(昭和堂、2005年)、『アンデス高地』(京都大学学術出版会、2007年)、『日本の哺乳類学2 中大型哺乳類・霊長類』(東京大学出版会、2008年)、『The Japanese Macaques』(Springer、2010年)、『日本の外来哺乳類:管理戦略と生態系保全』(東京大学出版会、2011年)などがある。